

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00501

研究課題名（和文）漢文文献読解の基層構造を解明するための敦煌漢文文献の精密記述研究

研究課題名（英文）Precise description study of Dunhuang Classical Chinese texts to elucidate the base layer structure of reading Classical Chinese texts in Sinosphere

研究代表者

小助川 貞次（KOSUKEGAWA, TEIJI）

富山大学・学術研究部人文科学系・教授

研究者番号：20201486

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：漢字文化圏における漢文文献読解の基層構造を解明するために、まず基礎的研究として、これまでに調査したStein本74点、Pelliot本146点の合計220点の漢籍を対象に、日本の漢籍訓点資料とも比較しながら、加點時期と加點状態との関係を明らかにして公表した。さらに個々の資料の加點内容と加點状態を視覚的かつ数量的に把握できるように、Stein本9点（S.85,799,801,2074,5626,5745,6017,6259,8464）とPelliot本2点（P.2516,3670）の書誌記述ファイルと加點情報付テキストを作成して公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

敦煌漢文文献の加點については従来から研究が行われてきたが、本研究によって、特に漢籍の全体像を加點時期と加點内容の関係から解明できたことは、漢字文化圏諸地域に現存する敦煌漢文文献以外の漢文文献における読解方法と加點現象との関係を解明する上でひとつの指針になりうるものである。また、従来の研究では敦煌漢文文献を画像や写真で部分的に取り上げるだけであったが、視覚的かつ数量的に把握できるテキストベースで記述したことは、精密な比較研究を行なう基礎ができたことになり、漢字文化圏における漢文読解の研究が一層進展できる契機を作ったことになり、学術上の意義は極めて高い。

研究成果の概要（英文）：In order to elucidate the basic layer structure of reading Classical Chinese texts in the Sinosphere, first of all, as a basic research, I targeted a total of 220 Classical Chinese texts in Dunhuang, 74 materials of Stein collection and 146 materials of Pelliot collection, which have been surveyed so far, were clarified and published by the relationship between the glossed time and the glossed status while comparing with the Japanese glossed texts. In addition, for 9 materials for Stein collection (S.85,799,801,2074,5626,5745,6017,6259,8464) and 2 materials for Pelliot collection (P.2516,3670), bibliographic description files and texts with glosses were created and published.

研究分野：日本語学 訓点語学 古典籍学

キーワード：敦煌漢文文献 漢文文献読解 加點情報 書誌情報 漢字文化圏

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) ある地域で広く共有される古典語文献を、後世これと同類の言語、或いは周辺の諸言語で読解しようとする場合、古典語文献の本文に何等かの書込・加点が加えられる(日本の漢文訓読の訓点のように)。書込・加点は日本語の仮名のように文字でなされることもあれば、句読点などのように符号でなされることもある。この読解方法は、元のテキストを表示しない翻訳とは異なり、元のテキストが持つ言語情報(漢文の場合であれば漢字・漢語)をできるだけ生かしながら、或いは温存させながら行なう点で巧妙な方法である。

この書込・加点的現象は東アジアの漢文文献のみならず、ヨーロッパの中世ラテン語注釈文献でも確認され、近年はそれぞれの研究の進展を踏まえた国際的研究交流も行われている。このような研究交流を一層推進していくためには、基礎データ(画像、テキスト記述データ)の作成と公開が不可欠である。中世ラテン語注釈文献の研究では、すでに高精細画像と書込内容を記述したテキストデータとが Web 上で公開されている(St Gall Priscian glosses)。これに対して漢文文献の研究では、敦煌漢文文献の画像(IDP、Gallica)と一般的な漢文テキストデータしか公開されていない(漢籍では中央研究院・歴史語言研究所「漢籍電子文献資料庫」、仏典ではSAT 大正新修大蔵経テキストデータベース)。書込・加点的内容については、解読結果を紙媒体で公開しているものもあるが、多言語で利用できるように形式にはなっていない。この点で、漢文文献の書込・加点的内容の記述的研究は、ヨーロッパの中世ラテン語注釈文献の研究に比べて、格段に立ち遅れている。

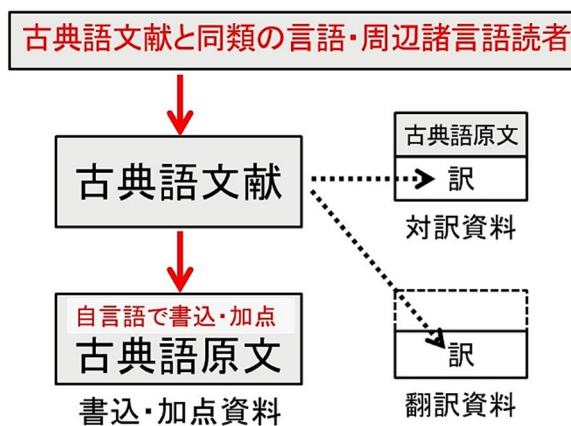


図1 古典語文献の読解

(2) 我々は古典語文献を読解しようとする時に、言語や文化、時空間の違いがあるにも拘わらず、なぜ類似した読解方法を選択し、あるものはなぜ現代にまで継続するのか。もし中世ラテン語注釈文献と漢文文献に見える書込・加点的現象を、精密な記述資料とその背後にある書込・加点的原理に基づいて比較することができるならば、古典語文献を巡る世界の普遍性の追求と解明に繋げることが可能になる。錯綜する現代社会や不透明な近未来社会の在り方に対する根源的な問いを内包するものとして、本研究の射程が意味するところは極めて大きい。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、ヨーロッパの中世ラテン語注釈文献の研究に比べて格段に立ち遅れている漢文文献の書込・加点的現象についてテキストベースの精密記述を行い、その上で漢字文化圏における漢文文献読解の基層構造の解明を行なうとするものである。対象は敦煌漢文文献のうち、すでに実地調査を終えている漢籍(中国古典籍)207点とし、漢文本文に書き加えられている加点的内容(段落の区切りを示す「科段」、文と句の区切りを示す「句読」、漢字の派生義を示す「破音」、漢字音を分析的に示す「音注」)を精密に記述した加点的情報付テキスト、及びそれに基づく詳細な書誌目録を作成し、漢文文献読解の基層構造の解明を行なう。

(2) 敦煌漢文文献に関する従来の研究は、人文社会諸科学に關係する本文上の価値や佚書・佚文の価値が高く評価され、目録類や複製資料も早くから公刊されてきた(Lionel Giles の目録は1957年、敦煌遺書総目索引は1962年、敦煌宝蔵140冊の第一冊目は1981年)。しかし、書込・加点的現象に着目した研究は、石塚晴通(「楼蘭・敦煌の加点的本」1970年、「敦煌の加点的本」1992年、「声点の起源」1995年)と小助川貞次(「東アジア漢文訓読資料としての敦煌加点的本の意義」2007年、「敦煌加点的本を巡る研究課題」2008年、「東アジア学術交流史としての漢文訓読」2009年、「句読点の機能から見た東アジア漢文訓読史」2011年)を除けば皆無と言ってもよい。敦煌漢文文献の書込・加点的現象を明らかにすることは、中国周辺諸国(日本、韓国、ベトナム)に現存する漢文文献の書込・加点的現象との関係を明らかにできるだけではなく、将来的には中世ラテン語注釈文献における書込・加点的現象との比較を通して、古典語文献を巡る世界の普遍性の追求と解明に繋げることが可能になる点で、独自性、創造性は極めて高い。

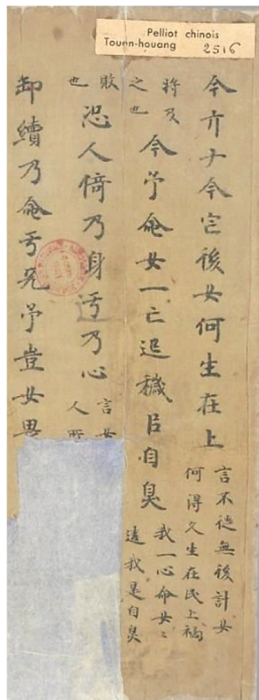
3. 研究の方法

敦煌漢文文献の内、すでに実地調査を終えている漢籍207点を各年度に割り振り、[A]~[G]の順序の研究計画を立案した(なお2019年冬頃からの新型コロナウイルスの感染拡大により、[D]~[F]のすべて、及び[G]の一部については実施することができなかった)。

[2018 年度] 論語 65 点、史記 1 点、漢書 7 点
 [2019 年度] 周易 9 点、尚書 30 点、毛詩 24 点、礼記 4 点
 [2020 年度] 春秋 29 点、孝經 21 点、晋書 2 点、文選 15 点

[A] 加點情報付テキストの作成

基礎処理として、中央研究院・歴史語言研究所「漢籍電子文獻資料庫」から電子テキストを入力し、敦煌漢文文獻の配行と字詰に合わせ整形、さらに本文異同、誤写、補入等について注記を加える。次に、この電子テキストに科段、句讀、破音、音注情報を追記し、加點情報付テキストを作成する。



001:今其 B 有 B 今罔 B 後女 s 何生
 在上《言不徒無後計.女 s 何得
 久生在民上.禍

002:將及之也》今予命 B*女 s\$.一.
 亡.起 Bk 穢以 B 自臭《我一心
 命女 s.々s 違我.是自臭

003:敗也》恐人 k 倚乃身*k [于=
 迂] 乃心《言女 s...人所...》(予)

004:k 卸 c 續乃命 B 于 B 天 B.予豈
 女 s 畏 c(用奉畜女衆)

図 2 Pelliot Chinois 2516 (左：Gallica による画像データ、右：加點情報付テキスト)

[B] 分析と書誌記述ファイルの作成

原本閲覧時のメモ及び加點情報付テキストに基づいて質的・量的把握と分析を行い、書誌記述ファイルを作成する。

[C] 書誌記述ファイルの点検

[D] 書誌記述ファイルの原本校正

大英図書館及びフランス国立図書館において書誌記述ファイルの原本校正を行なう。時期は 2019 年度と 2020 年度の各 11 月下旬に連続した 2 週間程度で実施する。また原本校正時に、それぞれの図書館の担当者と書誌記述ファイルの公開方法について協議を行う。

[E] 書誌目録の編集

[F] 書誌記述ファイルと書誌目録の翻訳と点検

[G] 研究成果の公開

4. 研究成果

(1) 漢字文化圏における漢文文獻読解の基層構造を具体的に解明するために、まず基礎的研究として、これまでに調査した Stein 本 74 点、Pelliot 本 146 点の合計 220 点の漢籍を対象に、日本の漢籍訓点資料とも比較しながら、加點時期と加點状態との関係を明らかにした「敦煌本漢籍における加點の問題について」を学会誌『訓点語と訓点資料』第 143 輯 (2019 年) に発表した。さらに、Pelliot 書誌情報ファイル及び Stein 書誌情報ファイルの整理を継続的に行うとともに、敦煌漢文文獻の加點内容を視覚的かつ数量的に把握できるようなテキストモデルとして、Stein 本・春秋経伝集解 (S.85) の記述研究を学会誌『訓点語と訓点資料』第 142 輯 (2019 年) に、Stein 本・尚書 8 点 (S.799、801、2074、5626、5745、6017、6259、8464) Pelliot 本・尚書 2 点 (P.2516、3670) についての書誌記述ファイルと加點情報付テキストを所属機関紀要『富山大学人文学部紀要』第 73 号 (2020 年)・同第 74 号 (2021 年) に発表した。

(2) 日本現存の漢籍訓点資料のうち、漢書楊雄伝 (京都国立博物館蔵) 高山寺本論語集解 (清原本 2 点、中原本 2 点) について精密調査に基づく解題を『国宝漢書楊雄伝第五十七』(勉誠出版、2019 年)、『高山寺経蔵の形成と伝承』(汲古書院、2020 年) に、一次資料に基づかない研究方法と研究成果利用の問題について論じた「訓点の信憑性」を学会誌『国語と国文学』第 96 卷

第5号(2019年)に、漢文本文と加点との関係の全体像を把握するために書写者(テキスト作成)読者(注釈活動・加点)所蔵者(伝承過程)という人の関わりに基づく「階層構造から見た唐鈔本漢書楊雄伝の研究課題」を学会誌『訓点語と訓点資料』第141輯(2018年)に、本研究を若手研究者が継承できるように論じた「訓点研究「超」入門」を『日本語文字論の挑戦』(勉強出版、2021年)に発表した。

(3) 敦煌漢文文献の加点現象として重要な破音について原理的な考察を行った「漢字文化圏における漢文文献への破音加点の意義」(ハノイ大学、2018年10月17日)ベトナムの漢籍加点本にも目を向ける必要性を論じた「ベトナム阮朝時代に論語はどのように学習されたのか」(ベトナム社会科学院(ハノイ)2019年8月15日)漢文文献の読解と加点現象を国際的に共有するための「漢字文化圏諸言語による漢文文献の読解と加点(改訂版)」(海外著名学者招聘オンライン発表・討論会、2020年8月1日)を海外の国際学会で発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小助川貞次	4. 巻 第74号
2. 論文標題 敦煌本漢籍書誌目録（ペリオ本・書類1）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 59-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小助川貞次	4. 巻 第73号
2. 論文標題 敦煌本漢籍書誌目録（スタイン・書類）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 刊行予定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小助川貞次	4. 巻 第143輯
2. 論文標題 敦煌本漢籍における加点の問題について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小助川貞次	4. 巻 第96巻第5号
2. 論文標題 訓点の信憑性について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 32-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小助川貞次	4. 巻 141
2. 論文標題 階層構造から見た唐鈔本漢書楊雄伝の研究課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小助川貞次	4. 巻 1
2. 論文標題 漢字文化圏における漢文文献への破音加点の意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 グローバル化時代における日本語教育と日本研究	6. 最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小助川貞次	4. 巻 142
2. 論文標題 敦煌本春秋経伝集解 (S.85) について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 小助川貞次
2. 発表標題 訓点研究「超」入門
3. 学会等名 第58回口訣学会夏季全国学術大会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小助川貞次
2. 発表標題 漢字文化圏諸言語による漢文文献の読解と加點（改訂版）
3. 学会等名 海外著名学者招聘オンライン発表・討論会「東アジアの漢文訓読」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小助川貞次
2. 発表標題 ベトナム阮朝時代に論語はどのように学習されたのか
3. 学会等名 The Vietnamese Confucian Examination System (1075-1919) and its Legacy（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小助川貞次
2. 発表標題 階層構造から見た唐鈔本漢書楊雄伝の研究課題
3. 学会等名 第118回訓点語学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kosukegawa, Teiji
2. 発表標題 Glossing and reading the Analects of Confucius（論語）by vernacular languages in the Sinosphere
3. 学会等名 Glossing cultural change: Comparative perspectives on manuscript annotation（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小助川貞次
2. 発表標題 漢字文化圏における正史類の古写本について
3. 学会等名 国際シンポジウム「古辞書研究の射程」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小助川貞次
2. 発表標題 漢字文化圏における漢文文献への破音加点の意義
3. 学会等名 2018年国際シンポジウム「グローバル化時代の日本語教育と日本研究」(国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 加藤重広・岡墻裕剛(担当: 訓点研究「超」入門)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 432(92-115)
3. 書名 日本語文字論の挑戦	

1. 著者名 石塚晴通・上杉智英・小助川貞次	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 108(79-100)
3. 書名 国宝漢書楊雄伝第五十七(担当: 本文・訓点解題)	

1. 著者名 高山寺典籍文書綜合調査団	4. 発行年 2020年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 536 (173-179)
3. 書名 高山寺経蔵の形成と伝承 (担当: 高山寺蔵論語集解 (清原本・中原本) 解題・影印)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	石塚 晴通 (Ishizuka Harumichi) (10002289)	北海道大学・その他部局等・名誉教授 (10101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------